

## 養成段階における教員の資質能力の形成

— 平成12年度1年次観察・参加実習を中心にして —

有吉 英樹 (岡山大学教育学部)

こんにち、不登校や高校中退、いじめや暴力行為などの教育問題を解決していくためにも、さらには、急激に変化する社会に主体的に対応していくためにも、次世代を育てる教員の資質能力の形成と向上が強く求められている。教員の資質能力の形成と向上は、養成段階、採用段階および現職研修段階においてなされるものである。

本稿では、教育職員養成審議会の答申を踏まえながら、養成段階における資質向上について重要な役割を担う教育実習の中で、とくにその最初の段階である1年次観察・参加実習に焦点を当てて、考察を意図した。平成12(2000)年度に実施した本学部1年次観察・参加実習のアンケート調査の結果を分析し、その成果と問題点、課題等を明らかにする。

キーワード： 教員養成，資質向上，教育実習，観察・参加

### 1. はじめに

日本における義務教育就学率は、昭和63(1988)年度以降こんにちに至るまで、つねに99.99%台を示している。高校進学率については平成12(2000)年度には95.9%、大学・短期大学等進学率は49.1%に達している。このように、学校や大学等における教育は、かつてないほど普及しているが、他方では、学校に背をそむける子どもたちが増加している。平成11(1999)年度の小中学校における不登校者数は13万人台をはじめて超え、高校中退者数は近年10万人台を上下している状態にある。いじめや暴力行為、学級崩壊、薬物乱用等々の深刻な教育問題も多々生じている。

さらに、変化の激しい現代社会は、国際化・情報化・高齢化等の諸々の問題に関連して、新しい教育課題を次々と学校および教師たちに提起し、それらの課題についての創造的な実践を求めている。

教員には、学校教育をめぐるこのような複雑な状況の中で、主体的かつ的確に対応しうる資質能力がとりわけ必要とされるようになってきた。教員の資質能力の形成と向上のプロセスは、養成段階、採用段階、現職研修段階の3つに大別できる。各段階における資質能力の形成および向上について、教育職員養成審議会(以下、教養審と略す)の一連の答申が詳しく論じている。

本稿は、これらの答申内容のうち、養成段階にお

ける資質能力の形成について、主として「教育実習」とのかかわりにおいて考察する。これと関連して、次に、本学部の学校教育教員養成課程および養護教諭養成課程の1年次生を対象に平成12年度に実施した観察・参加実習のアンケート調査をもとにして、観察・参加を体験することによって、学生の意識がどのように変容したのかを分析し、養成段階の資質能力の形成過程における観察・参加の成果を明らかにする。さらに、問題点と今後の課題についても検討を加える。

### 2. 養成段階における教員の資質能力の形成

昭和62(1987)年の教養審答申(注1)は、子供たちの心身の発達に関わり人格形成に大きな影響を及ぼす教師の仕事に専門職としてとらえ、養成・採用・現職研修の各段階を通じて形成されていくべき資質能力を図1のように挙げている。

教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養



これらを基盤とした実践的指導力

図1 昭和62年教養審答申 資質能力

答申が掲げているこのような資質能力はいわば、

いつの時代にも専門職・教師に求められている普遍的な一般的なものであると言えよう。

平成9(1997)年の教養審第1次答申(注2)は、先の一般的な資質能力を前提としたうえで、変化の激しい時代にあって、「生きる力」を育む教育を行う教員に今後特に求められる資質能力を、新たに加味して、図2のように資質能力の全体像を提示した。

① 地球的視野に立つて行動するための資質能力
・地球、国家、人間等に関する適切な理解 ・豊かな人間性 ・国際社会で必要とされる基本的資質能力
② 変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力
・課題解決能力等にかかわるもの ・人間理解にかかわるもの ・社会の変化に適応するための知識及び技能
③ 教員の職務から必然的に求められる資質能力
・幼児・児童・生徒や教育の在り方に関する適切な理解 ・教職に対する愛着、誇り、一体感 ・教科指導、生徒指導等のための知識、技能及び態度

図2 平成9年教養審第1次答申 資質能力  
(教養審第1次答申に基づき、概略図を作成)

これからの教師には、①に示されているように、地球的な視野に立つて考察を深め、子どもたちの発達段階に即して教育的な働きかけのできる資質能力が求められている。②に関しては、変化の時代を生きる社会人に必要な資質能力の第1に課題解決能力と自己教育力、第2に人間関係能力、第3に外国語によるコミュニケーション能力とコンピュータ活用能力などが挙げられている。さらに、「得意分野をもつ個性豊かな教員の必要性」についても強調している。

答申は、「採用当初から教科指導、生徒指導等を著しい支障が生じることなく実践できる資質能力」を「実践的指導力の基礎」としてとらえたうえで、この「実践的指導力の基礎」を教職志願者に修得させることが大学の責務である、と断っている。上述したような考えに基づいて作成され、答申の中で提示された教員養成カリキュラム改革案に基づいて、教育職員免許法令が平成10(1998)年に改正された。

答申の言う「応用的・実践的な内容に係る技能等を教授」し、「実践的指導力の基礎」を修得させる科

目の1つとして、理論と実践の接点をなす「教育実習」の有する意義と役割はきわめて大きい。

実習生にとっては、全ての教科の学習成果や人間的な諸力が教育実習の場において収斂され、検証され、資質能力のさらなる形成と向上を求められ促されるからである。

他方で教育実習は、実習生を通じて大学教員の教育活動を問うことになるし、さらには教員養成カリキュラム全体に対する評価へ、そしてその継続的な改革へと連動していく性質を有している。

事前指導・事後指導を前後において、観察・参加に始まり、本実習、協力校実習へとつながる教育実習は、社会状況・教育状況が激しく変化している現在、4年間のカリキュラム全体の中でどのように位置づけられ、どのような内容・方法で運営されるべきか、常に検討と改革・刷新が求められている。

### 3. 1 年次観察・参加実習の運営

#### (1) 4 学年一貫実習について

岡山大学教育学部では平成11年度の学部改組に伴い、従来の幼稚園教員養成課程、小学校教員養成課程、中学校教員養成課程および養護学校教員養成課程の4課程が統合されて、学校教育教員養成課程(定員170人。2年次からは小学校教育専攻・中学校教育専攻・幼児教育専攻・障害児教育専攻の4つの専攻に分かれる。)が創設されたことにより、同課程の4年一貫教育実習は、第1免許の場合、以下のように1年次から4年次の各段階において積み上げ方式によって行われることになった(ここでは、事前・事後指導については省略する)。

なお、養護学校教諭養成課程の場合には、「保健」が第2免許として必修となったため、「保健」の教育実習が課せられることになった。

#### 1) 学校教育教員養成課程の教育実習

① 1年次観察・参加実習は、前期に附属4校園(附属小学校、附属中学校、附属養護学校、附属幼稚園)において各1日ずつ、計4日間実施する。

② 2年次の場合については、障害児学校(協力校：県立盲・聾・養護学校)においてそれぞれ分散して行われる2日間の観察・参加と、社会福祉施設において実施される5日間の体験とを合わせ7日間とする。この7日間は、小学校教員および中学校教員の免許状取得に必要な「介護等の体験」に対応する。

但し、障害児教育専攻はこの2日間の観察・参加の替わりに、附属養護学校において1週間の実習が行われる。

- ③ 3年次の教育実習は、第1免許状の種類に応じて後期に各附属学校園で実施する。
- ④ 第2免許状を必修としたため、4年次では第2免許としての教育実習を実施する。

従来、必修としていた4年次における1週間の応用実習は、選択とする。

## 2) 養護教諭養成課程の養護実習

- ① 1年次観察・参加実習は、学校教育教員養成課程と同じ。
- ② 2年次観察・参加実習は、附属4校園への1日養護実習、計4日間。
- ③ 3年次は、本実習を附属で1週間、協力校実習を2週間。
- ④ 4年次では、第2免許の「保健」実習を附属および協力校で各2週間。

このように2つの課程の学生たちは、4学年にわたる実習を通じて学校教育実践と関わりながら、「実践的指導力の基礎」を修得していくことが期待されている。

## (2) 1年次観察・参加の目的

1年次において附属4校園をそれぞれ1日観察参加実習させる目的は、校種の異なる学校現場のそれぞれの実情、教師の仕事および授業の特徴や相違、発達段階の異なる子どもたちの実態などについて、実体験による学習を早期にさせて、教職への意欲を喚起し、学生たちが問題意識をもって自ら見出した研究課題に積極的に取り組むように働きかけることにある(注3)。

なお、学校教育教員養成課程の学生の場合は、1年次の終わりに、先に述べた小学校教育、中学校教育、障害児教育および幼児教育の、4つの専攻のうち1つを選択し自己決定しなければならないので、1年次観察・参加実習の体験はその際の重要な判断材料の一つになると思われる。

## 4. 研究の目的

先述した教養審答申の理念および平成10(1998)年に改定された免許法令に基づく本学部の教員養成カリキュラムが、「生きる力」を育てる資質能力や、地球や人類の在り方を自ら考え教育活動に生かすよ

うな「今後教員に求められる資質能力」をどのように形成させ向上させていくことができるのか。それを測定し改善していくためには、カリキュラム全体に対する継続的な検討と調査が必要であろう。

とはいえ、その中の1科目である「教育実習」もまた、一つの重要な測定評価の指標になると思われる。4年一貫教育実習がそれぞれの時点および相互の関連において、どのような成果や問題点、課題等を有するのか、それらを明らかにする研究の最初の段階として、本稿では平成12年度の1年次観察・参加実習について、主として実習生の意識の変容を調査し、分析と考察を試みた(注4)。

## 5. 調査方法

12年度の入学生を対象に、本年度前期に実施された附属小学校・養護学校・幼稚園における1日観察・参加実習について、2つの養成課程の実習生を対象に実施したアンケート結果および彼らが綴った「観察・参加の記録」ノートに基づいて、その成果と課題を究明しようとした。

- ・ アンケートの調査対象：

平成12年度

「学校教育教員養成課程」1年生

回答者：169名(在籍者181名)

「養護教諭養成課程」1年生

回答者：31名(在籍者31名)

合計：200名

- ・ 調査時期：1年次附属校園観察・参加実習の事後指導の日(平成12年9月13日)

## 6. 結果および考察

以下、それぞれの調査項目についてその結果を示し、検討と考察を加えていくことにする。

なお、便宜上、学校教育教員養成課程を学教課程、養護教諭養成課程を養教課程と略記することもある。

### (1) 教職へ志望度の変容

表1は、入学の時点での教職への志望度が、観察・参加実習を体験することによって、どのように変容したのかを調査したものである。

入学の時点で学教課程は53%、養教課程は48%の者が教職への強い希望を抱いている。学教課程では観察・参加後に、①是非、教職に就きたいと思う者が14人増加して、合わせて62%に達している。③が8、④が5、それぞれ減じていて、観察・参加

の影響がうかがえる。他方、養教課程の場合は人数 から見れば、志望度にさほどの変容は無い。

表1 教職への志望度の変容

	学教課程		養教課程	
	入学時点	観察・参加後	入学時点	観察・参加後
①是非、教職に就きたい	90 53%	104 (+14) 62%		17 (+2) 55%
②できれば、教職に就きたい	41 24%	40 (-1) 24%	8 26%	6 (-2) 19%
③どちらともいえない	25 15%	17 (-8) 10%	3	5 (+2)
④どちらかといえば教職に就きたくない	11	6 (-5)	4	2 (-2)
⑤どうしても教職以外の職に就きたい	2	2	1	1

(学教課程 N=169 養教課程 N=31)

## (2) どの学校種の教員を第1免許として希望するか

表2 どの学校種の教員を希望するか(第1希望についてのみ)

校種・教諭・課程	学教課程		養教課程	
	入学した時点	観察・参加後	入学した時点	観察・参加後
① 保育士	7	6 (-1)	0	0
② 幼稚園教諭	10 6%	9 (-1)	0	0
③ 小学校教諭	53 31%	87 (+34) 51%	0	0
④ 中学校教諭	84 50%	47 (-37) 28%	0	0
⑤ 養護学校教諭	4	5 (+1)	0	0
⑥ 養護教諭	0	0 (0)	26	26 (±0)
⑦ 高校教諭	3	2 (-1)	0	0
⑧ 分からない	1	6 (+5)	1	1 (±0)
⑨ 教職以外	7	7 (±0)	4	4 (±0)

(学教課程 N=169 養教課程 N=31)

表2は、入学の時点ではどの学校種の教員を、第1希望の免許取得と関連して考えていたのか。そして、その考えが観察・参加後にどのように変化したのかを表すものである。

学教課程の場合、特徴的なのは観察・参加後に小学校教諭希望者が34名も増えて87名(51%)にもなっており、逆に中学校教諭希望者は37名減の47人(28%)と、大幅に少なくなっていることである。そのほかの学校種の教諭に関しては、ほとんど変化は無い。⑦分からない、が少々増えている程度である。

図3は、学教課程の各専攻別の標準定員と、上記表2に示しているように、観察・参加後に第1免許として希望する学校種別ごとの学生数とを比較してみたものである。

この標準定数からのみ見るならば、観察・参加後に、小学校教諭希望者が大幅に増加したとは言え、定数に比してまだ33名の余裕がある。逆に、中学校教諭希望者は大幅に減少したものの、定数を未だ

17名も超えている。定数を大きく超えるならば、演習や卒論指導への影響が懸念されよう。しかしながら、定数に学生数を合わせるのでは決してなくて、学生たちが自己の適性や方向性を充分に考え判断できるような、重要な機会および場を提供するものの一つとして、観察・参加実習はとらえられるべきであろう。なお、図3は、専攻別の希望調査を行ったものではない。

	標準定数	学校種別第1免許希望者	定数－希望者数
小学校教育専攻	120	87	+33
中学校教育専攻	30	47	-17
障害児教育専攻	10	5	+5
幼児教育専攻(注5)	10	幼稚園教諭 10 +保育士 7	-7

図3 学校種別第1免許希望者数と専攻別定数

養教課程については、入学時と観察・参加後とでは全く変化が見られない。養護教諭希望者は 26 名のままであり、養護教諭になりたいという強い意思をもって入学したと思われる。⑦と⑧については、それぞれ前後ともに同数であった。ちなみに養教課程の標準定数は、30 名である。

表 2 に関して、第 1 希望として選ぶ理由

学生たちには、どの学校種の教諭を第 1 免許の希望として選ぶのか、その理由を記述式で回答してもらった。それらの回答のうちいくつかを、表 2 の①から⑨までの項目にわたって、以下に示すことにする。

(括弧内の矢印は、観察・参加後に希望の校種を変えた学生を意味する。)

- ①・より小さな子どもに接してみたい。  
・保育士になりたくて岡大にきました。
- ②・子どもとの関わりがとても強く、体全体を使って子どもとコミュニケーションできるところが自分にはとても魅力があった。  
・子どもがかわいかったから。
- ③・実習を終えて、小学校に関心をもったから(③←④)。  
・教科担任制である中学校より、一人一人の生徒と関わりを持てる時間が多いから(③←④)。  
・小学校の時期が一番多感で、成長の面でも目に見えて変わってくる。また、好奇心も旺盛で教えがいがあると思ったから(③←④)。  
・小学校 6 年間で大いに成長していく子どもたちと、学級担任という形でより親密に学びあい、また幅広い人間関係を築きたいから。

- ・子どもたちの成長の基礎となっていく初等教育において、心のケアを重点において教育にたずさわっていききたいから(③←⑧)。
- ④・中学校の頃、一番悩みやすい時だから、やりがいがある。  
・人の一生で一番精神的に不安定な時期だと思うので、自分がそれを支えたい。  
・一つの教科をより深く専門的に教えていききたいから。
- ⑥・障害を持つ子どもたちと少しでも多く時間を共有したいから。
- ⑦・専門性が深いことと、自分自身の高校時代が有意義だと思ったから。
- ⑧・子どもたちと接してみると、大変楽しく有意義な時間を過ごすことができたし、大変勉強になったので、迷いが生じてきたから(⑧←公務員希望)。  
・どの校もやりがいがあることが身をもって分かったので、決定がしづらくなったから(⑧←④)。

- ⑨・図書館司書希望。子どもが本と接する機会を作りたいから。

(なお、ここでは養教課程の回答にはふれていない。)

以上のように、入学当初から自分の進路・方向性をしっかりと考えている者、観察・参加を通して入学時とは別の視点や考えも持つようになった者、教職を目指してはいないが子どもと関わる仕事を希望している者など、それぞれ学生たちの考えや気持ち、意思等の一端をうかがい知ることができよう。

(3) 観察・参加前後の気持ちの変容

表 3-1 観察・参加前後の気持ちの変容 学校教員養成課程について

項目 \ 校種	幼稚園		小学校		中学校		養護学校		総計	
	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
① とても楽しみ ⇒とても楽しかった	108	137 (+29)	82	118 (+36)	58	41 (-17)	34	48 (+14)	282 42%	344 51% (+62)
② どちらかと言うと楽しみ ⇒どちらかと言うと楽しかった	28	20 (-8)	58	39 (-19)	60	65 (+5)	64	71 (+7)	210	195 29% (-15)
③ どちらとも言えない ⇒どちらとも言えない	15	10	21	10	33	48	49	43	118 16%	111 17%
④ 少し気が進まない ⇒どちらかと言うと楽しくなかった	15	0	6	1	14	12	21	6	56	19 (-37)
⑤ とても気が進まない ⇒全然楽しくなかった	2	1	1	0	3	2	0	0	6	3

(5 項目に記入の無い者 1 名 168 名×4 校園 N=672)

学教課程の場合、4 校園の観察・参加がとても楽しみと回答した比率は 42%、とても楽しかったは 51%である。後者を、どちらかと言うと楽しかった、との回答と合わせると 80%に達する。4 校園のなかで、とても楽しかった、との回答者数の多い順は幼、

小、養、中、となっている。③の、どちらともいえない、は前が 118 名、後が 111 名であり、16%および 17%と、前後においてほとんど変化していない。この学生たちについては、その理由を調べてみる必要があるだろう。

表 3-2 観察・参加前後の気持ちの変容 養護教諭養成課程について

項目 \ 校種	幼稚園		小学校		中学校		養護学校		総 計	
	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
①とても楽しみ ⇒とても楽しかった	17	24	7	19	4	6	9	9	37 30%	58 47% (+21)
②どちらかと言うと楽しみ ⇒どちらかと言うと楽しかった	10	4	21	11	16	12	11	17	58	44 35% (-14)
③どちらとも言えない ⇒どちらとも言えない	1	3	3	1	5	11	11	5	20	20 16%
④少し気が進まない ⇒どちらかと言うと楽し くなかった	3	0	0	0	6	2	0	0	9	2
⑤とても気が進まない ⇒全然楽しくなかった	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

(31 名×4 校園 N=124)

養教課程の場合も、①のとても楽しみで、楽しかったのは、最高位は幼稚園であり、次いで楽しかった順位は、小、養、中、となっている。総計の後の

①と②を合わせると、82%となる。③については前後の変化は全く無く、20%のままであり、これについても調査が必要であろう。

#### (4) 観察・参加はどの程度勉強になったか

表 4-1 各校園の観察・参加はどの程度勉強になったか 学校教育教員養成課程について

項目 \ 校種	幼稚園	小学校	中学校	養護学校	総 数
①とても勉強になった	114 67%	147 88%	115 68%	125 74%	501 74%
②どちらかと言うと勉強になった	43 26%	19 11%	40 24%	36 21%	138 20%
③どちらとも言えない	8	1	10	6	25
④どちらかと言うと勉強にならなかった	1	0	2	1	3
⑤勉強にならなかった	2	1	1	0	4

(5 項目について未記入者 1 名 N=168)

表 4-2 各校園の観察・参加はどの程度勉強になったか 養護教諭養成課程について

項目 \ 校種	幼稚園	小学校	中学校	養護学校	総 数
①とても勉強になった	26 84%	24 77%	22 71%	30 98%	102 82%
②どちらかと言うと勉強になった	4	7	8	1	20
③どちらとも言えない	1	0	1	0	2
④どちらかと言うと勉強にならなかった	0	0	0	0	0
⑤勉強にならなかった	0	0	0	0	0

(N=124)

表 4-1 および表 4-2 は観察・参加がどの程度、自分にとって勉強になったと思うのかを回答したものである。学教課程では、①のとても勉強になったという回答は、小学校が最も多くて 88%、他の校園は 70%前後である。①と②の合計では、94%に達し

ている。他方、養教課程については、養護学校が極めて高く 98%となっている。これは、養護学校および養護教育に対する学生たちの関心と学習意欲が、非常に強いことに起因していると推察されよう。①について、学教の 74%に比して養教は 82%である。

(5) 観察・参加で、一番勉強になったと思うことは何か

表5-1 および表5-2 においては、4 校園での観察・参加を通じて一番勉強になったと思うことは何かを、各校園別に①から⑥まで具体的な項目を挙げてたずねている。1 年次の観察・参加実習の段階においては、これよりもさらに詳しい項目を立ててたずねることは無理と思われるので、あえて概括的な項目にした。

(5)の問である「一番勉強になったと思うこと」へ

の回答内容には、次の(6)の問である「子どもたちへの関わり方はどうであったか」への回答内容と同様に、4 校園のそれぞれが有する校種の特徴や独自性が反映されていると言えよう。それらの特徴や独自性は、観察・参加実習の日程内容にも容易にうかがい知ることができる。以下、4 校園における一日観察・参加の日程内容の一部を図4(注6)に示すことにする。

	日 程 内 容 の 一 部 ( 事 項 )
小学校	「業間の観察」としての「学年の遊びの観察」、配当学級における「児童への自己紹介」、「授業観察(3 時間、養教課程の学生は内 1 時間は保健室の観察)」、昼食時間の観察、「各クラスの遊びの観察と参加」、「清掃参加」、「終わりの会観察と挨拶」、「学年懇談」、「学級懇談(養教課程の学生は養護教諭と懇談)」等。
中学校	「配当学級の授業を参観(2 時間)して授業メモ、スケッチを作成する」、「教科指導教官の説明、指導(1 時間)」、「養教課程の学生は授業参観 (1 時間)、養護教諭の説明、指導 (2 時間)」、「まとめと反省」等。
養 護 学 校	「配当学級の授業参観」、「配当学級の日常生活指導(登下校、朝の会、休職準備、掃除、排泄、遊び等々)の観察」、「保健室の観察」、「養護教諭との懇談」、「校内の施設や教室環境などの見学」等。
幼稚園	「配当学級(およびそれを超えて)の保育観察・参加(園庭、各保育室、遊戯室)」、「施設見学」、「担任との懇談会(養教課程の学生は養護教諭との懇談会)」等。

図4 4 校園における 1 日観察・参加実習の日程内容の一部

表5-1 観察・参観で一番勉強になったこと 学校教育教員養成課程について

項目 \ 校種	幼稚園	小学校	中学校	養護学校	総 数
①子どもたちの実態把握	129 76%	37 22%	23 14%	68 40%	257 38%
②授業の展開方法	13 8%	73 43%	88 52%	47 28%	221 33%
③授業のテーマ	2 1%	9 5%	29 17%	6 4%	46 7%
④教師の職務内容	13 8%	23 14%	24 14%	29 17%	89 13%
⑤特活と学級経営	3 2%	19 11%	2 2%	10 6%	34 5%
⑥自分の研究課題	4 2%	7 4%	1	3	15
⑦その他	5 3%	1	2	6	14

(169 名×4 校園 N=676)

表5-1 に示すように学教課程の場合、幼稚園での観察・参観について一番勉強になったことは、①子どもたちの実態把握の比率が一番高く 76%であり、これは4 校園全体の中でも一番高い数値となっている。他方、幼稚園はそのほかの②から⑥までの項目に関しては、②授業の展開と④教師の職務内容がそれぞれ 8%と低く、⑤⑥③は極めて低い比率にとどまっていることが特徴的である。

小学校で一番勉強になったことは、②授業の展開方法が 43%で 1 位、次いで①子どもたちの実態把握が 22%となっている。④職務内容は 14%で、これは中学校の場合と同じ数値となっている。

中学校では、②授業の展開方法が他の項目の比率と大きく差をつけ、52%で 1 位となっており、これは4 校園の中でも 1 位である。③①④については 10%台である。

養護学校については、①の 40%は小学校に次ぐ数値である。②が 28%、④の 17%は4 校園で最も高い。

②の授業のテーマに関しては全体的に低く、中学校の 17%が最高値である。

なお、⑥自分の研究課題に関しては、他の項目と比較して4 校園共に比率が非常に低く、小学校の 4%が4 校園での最高値となっている。

1 年次生にとって、各校園 1 日ずつの観察・参加だけで、自分の研究課題を見出すことはこの数値から判断すると、非常に困難であると思われるし、それは無理からぬことであろう。しかし、数値が低いのは他の項目と比較したら低いと言うことであり、後述するように、「観察・参加を通して、これから先、何を学ぶ必要があると思うか」と言う問に対しては、実習生たちは様々な自分の考えを綴っている。

表 5-2 観察・参加で一番勉強になったこと 養護教諭養成課程について

項目 \ 校種	幼稚園	小学校	中学校	養護学校	総 数
①子どもたちの実態把握	24 12%	7	8	13 10%	52 42%
②授業の展開方法	6	17 13%	12 10%	9 1%	44 35%
③授業のテーマ	0	2	6	1	9
④教師の職務内容	0	2	4	5	11 9%
⑤特活と学級経営	1	1	1	1	4
⑥自分の研究課題	0	1	0	2	3
⑦その他	0	1	0	0	1

(31 名×4 校園 N=124)

表 5-2 の養教課程に関して、①子どもたちの実態把握は幼稚園が最も高く 12%、養護学校が次いで 10%となっている。②については小学校が一位で 13%、これに中学校の 10%が続いている。⑤と⑥はゼロまたは極めて低い。なお、⑥に関しては先述した学教課程の場合と同様の指摘ができると思われる。

## (6) 附属 4 校園観察・参加実習において、子どもたちへの関わり方はどうであったか

表 6-1 子どもたちへの関わり方 学校教育教員養成課程

項目 \ 校種	幼稚園	小学校	中学校	養護学校	総 数
①自分から積極的に話したり遊んだりした	146 86%	94 56%	8 5%	6 4%	254 38%
②少し話したり遊んだりした	22 13%	67 40%	25 15%	31 18%	145 21%
③あまり関わらず観察することが多かった	0	7 4%	114 67%	105 62%	226 33%
④全く関わられなかった	1	1	20 12%	24 14%	46 7%
⑤分からない	0	0	2	3	5 1%

(169 名×4 校園 N=676)

表 6-1 の学教課程について、①子どもたちに積極的に関わることができた学生は、幼稚園が最も多くて 86%、次の小学校は 56%、中学校および養護学校は極端に少なく 5%および 4%となっている。

幼稚園と小学校の場合、②の少し話したり遊んだり、の項目の比率を合計すると幼稚園は 99%という高率になり、小学校も 96%と両者共に 100%に近い状態である。中学校および養護学校では、③と④を合計すると中学校は 79%、養護学校は 76%と両者

共に子どもたちへ関わることのできなかった実習生が多く、8 割に近い状態である。

このような校種による顕著な相違は、先述したように幼稚園と小学校では子どもたちの遊びや活動などに参加したり、子どもたちの前で自己紹介したりする機会があること、他方、中学校や養護学校では参加実習ではなくて観察実習に重点を置いていること等に起因するものであろう。

表 6-2 子どもたちへの関わり方 養護教諭養成課程

項目 \ 校種	幼稚園	小学校	中学校	養護学校	総 数
①自分から積極的に話したり遊んだりした	29 94%	10 32%	0	0	39 31%
②少し話したり遊んだりした	2	21 68%	1	5 16%	29 23%
③あまり関わらず観察することが多かった	0	0	21 68%	20 65%	41 33%
④全く関わられなかった	0	0	9 29%	6 19%	15 12%
⑤分からない	0	0	0	0	0

(31 名×4 校園 N=124)



表 6-2 の養教課程の場合も、先の学教課程と全く同様の傾向が表れている。①は幼稚園で 94%、小学校では①と②を合わせると 100%になる。他方、

中学校と養護学校では①はゼロである。中学校および養護学校については、それぞれ③と④を合わせると 97%および 84%という高い比率となっている。

(7) 学校種の異なる 4 校園での観察・参加は、教職への意欲を高める上で有意義であったか

表 7 教職に就こうとする意欲を高める上で有意義であったか

項目 \ 課程	学校教員養成課程		養護教諭養成課程		合 計	
①有意義であった	143	85%	28	90%	171	86%
②どちらとも言えない	25	15%	3	10%	28	14%
③有意義でない	1		0		1	

(学校教育教員養成課程 169 名、養護教諭養成課程 31 名 N=200)

表 7 は、教職への意欲を喚起する上で有意義であったかを問うた結果を示している。①有意義であったと評価する者は、学教課程では 85%、養教では

90%である。②のどちらとも言えないは、それぞれ 15%、10%である。②を回答した者について、その理由に関しては問いをしていないので不明である。

(8) 学校種の異なる 4 校園での観察・参加は、自分がどの校種に向いているのか選択する上で、有意義であったか

表 8 自分がどの校種に向いているかを選択する上で有意義であったか

項目 \ 課程	学校教員養成課程		養護教諭養成課程		合 計	
①有意義であった	118	70%	16	52%	134	67%
②どちらとも言えない	49	29%	15	48%	64	32%
③有意義でない	2		0		2	

(学校教育教員養成課程 169 名、養護教諭養成課程 31 名 N=200)

自分がどの校種に向いているのか選択するのに、観察・参加は有意義であったか、の間に学教課程の実習生は 70%、養教課程では 52%が有意義であった、と回答している。この数値の中には、入学当初からすでに校種を決めていた者が、観察・参加の体験を通じて自分の適性を再確認したケースも含まれると思われる。養教課程については、特にそうであろう。また、学教課程では、先の(2)の表 2 に示され

ているように、観察・参加後に小学校教諭希望者が 34 人増え、逆に中学校教諭希望者が 37 人減じたことから明白なように、観察・参加の体験は、校種の選択に大きな影響を及ぼしていることが分かる。

もちろん、この時の選択が決定的と言うものでは決してない。その後の様々な学習や体験等を通じて、学生たちはさらに改めて選択をしていくことだろう。

(9) あなたの卒業した高校では、あなたの高校時代にインターネットを活用した授業が、およそどのくらいの回数で行われていましたか

表 9 高校時代にインターネットを活用した授業が、およそどのくらいの回数で行われていましたか。

項目 \ 出身高校別	県内公立	県内私立	県外公立	県外私立	国立	合 計
①日常的に行われていた	0	0	0	1		1
②月に数回行われていた	2	0	3	1		6 3%
③一学期に数回	3	0	2	0		5 3%
④年に数回	16 25%	0	11 10%	2 15%		29 15%
⑤全く行われていなかった	43 67%	10	91 85%	9 69%		153 79%
合 計	64	10	107	13	0	194

(県内公立=64 名、県内私立=10 名、県外公立=107 名、県外私立=13 名、国立=0 名、N=194 名、無回答者=6 名)

表9は、「高校時代に、インターネットを利用した授業がどのくらいの回数で行われていたか」を問うた結果を示している。この問は、観察・参加実習に直接的な関係をもつものではないが、設定してみた。現在、学校現場では情報化が急速に進められており、しかも新学習指導要領の実施に伴い学校教育の内容や方法、在り様は大きく変化しつつある。教員希望の学生たちは、いずれ数年後にはインターネットを活用した授業形態も担当することになるだろう。したがって、彼らの入学時点での技能を把握して、近未来の学校現場において必要とされる技能との格差を4年間で解決する教育が、大学において提供されねばならないだろう。

ちなみに、「ミレニアム・プロジェクト」(注7)で

は、「2005年を目標に、全ての小中高等学校等からインターネットにアクセスでき、全ての学級のあらゆる授業において教員及び生徒がコンピュータを活用できる環境を整備する」方針を掲げている。

表9に見るように、①日常的に行われていたのは194校中わずか1校(県外の私立)のみであり、②月に数回は6校、④年に数回は29校(15%)、⑤全く行われていなかったは実に153校もあり、79%の高い比率となっている。このような高校時代を過ごした学生たちに対する教育については、情報関係の授業科目だけではなく、教員養成カリキュラム全体の中で検討しその解決策等を講じていく必要があると思われる。

#### (10) この観察・参加を通じて、あなたはこれから先、在学中に何を学ぶ必要があると実感しましたか。

この問は、文章記述を求めたものであり、4校園の1日観察・参加実習の体験を経て、今後の自己の学習・研究課題をどのように考えているのかについて、回答を求めた。その内容は学生それぞれに多様であったが、ここでは紙幅の関係で数人の分のみ以下に紹介する。ここには、学生たちが自らの課題を発見して、興味や関心を抱いて学習していこうとする姿を見ることができる。

- ・専門的なものだけでなく、子どもをより理解するために、実態を把握し、心理的な面も勉強しないとと思った。
- ・いろんな場面での子どもへの対応の仕方。
- ・生徒との接し方や、生徒が興味を持つような工夫のある授業の進め方。
- ・生徒とのコミュニケーションの取り方。生徒が楽しめる授業の展開の仕方。
- ・授業の方法や子どもたちの指導の仕方を学ぶだけでなく、積極的にボランティア活動に参加したり、子どもと触れ合う機会を自ら作って行って、子どもや人との関わりを多く作り、人生経験を豊富にしていく必要。

- ・小学校においては低学年、中学年、高学年と幅広いので、どのような接し方をすべきなのか、また心の成長やケアなどを学んでいかなければならない。
- また、教官が子どもたちに何をさせたいか、何を期待し、配慮して接するのか学ばなければならないと思った。
- ・心理的な理論ももちろん必要とされるが、それと同時にいろいろな経験を積んで、実践力を養う必要。
- ・子どもたちの実態やとりまく環境に目を向け、教師として子どもにどう接していくべきか、授業の展開や指導方法を学びたい。そしていろいろな経験を積んで、さまざまな面から教育というものに深く関わっていききたい。

### 7. 1 年次観察・参加実習の成果、問題点および課題

#### (1) 成果について

1年次観察・参加実習の成果として、前述してきた事項の中から主たるもの示すならば、以下の諸点が挙げられよう。

1) 教職への志望度を高め、教職への意欲を喚起させていること。2) 「とても楽しかった」との気持ちを抱かせ、「とても勉強になった」という体験学習になっていること。3) 具体的には、校種ごとの特性

に応じて子どもたちの実態や授業の展開方法などを学び取っていること。5) 特に幼稚園と小学校においては、子どもたちと直接かわりながら、実態を把握し教師の指導等を学んでいること。6) どの校種に自分が向いているのかを考え、専攻を決める際の判断資料になっていること。7) 4日間を通じて、学生たちが学習・研究に取り組んでみたいテーマ等を見出す機会を提供したり、彼らの学習意欲を喚起する役割等を果たしていること。

## (2) 問題点について

問題点としては、次のような事柄がある。

1) 実習生の数が多くて、事前・事後において個別的な指導や相談活動が困難であること。2) 表 5-1 および 5-2 に見受けられるように、中学校および養護学校では「子どもたちの実態を把握すること」が、現行の観察・参加の運営方法では困難な状態にあること。3) 学教課程の学生の場合(障害児教育専攻を除く)、2 年次は 7 日間の介護等体験のみであって、附属校園での実習は設定されていないため、この学年では附属との関係が弱くなるという難点がある。4) 観察・参加実習を通じて学生たちが得た問題意識や研究課題を、彼らがその後どう発展させているのかについて、追求したり学習・研究活動を支援するような態勢が重要であるにも関わらず、もっぱらそれは個々の教員の自覚と努力に任されていて、適切な措置が講じられていないこと。

## (3) 課題について

前述の(2)に挙げた諸々の問題点を解決していく諸課題のほかに、1) 表 9 に示されているように情報教育の充実が強く望まれる。2) さらに事前指導、実習および事後指導に関して、学生同士および学生と学部教員とが交流と相互理解を深めてより効果を上げるためにも、インターネットを活用した事前・事後指導のシステム開発が促進されるべきであろう。3) 観察・参加に始まり 2 年次、3 年次、4 年次の実習へと連なるプロセスの各段階において、学生たちにそれぞれどのような資質能力を形成させ発展させていくべきか、その具体的な中身と相互の連続性の在り様に関しても、明らかにしていく必要がある。

## 8. おわりに

学教課程および養教課程の附属 4 校園における平成 12 年度 1 年次生観察・参加実習について、アンケート調査を手がかりにして、両課程および 4 校園の特徴と傾向、観察・参加実習の成果と問題点、課題等を考察してきた。彼らが 2 年次、3 年次さらに 4 年次において積み上げ方式の形態で取り組む実習が、どのような成果と課題を有することになるのか、それに関しては、今後の継続的な調査と研究が必要である。

教育実践の場において理論と実践が融合する特性をもつ実習と、実習以外の諸教科、とりわけ免許法令の改正によって必修となった「教育の方法及び技術(情報機器及び教材の活用を含む)」に関する科目や、人類に共通する課題や社会全体にかかわる課題を対象とする「総合演習」等の科目とが、実習

を軸にしてどのように関連し合いどのように影響を及ぼしあって展開していくのか、また、展開させていくべきなのか。

先述した教養審の答申内容と照応させながら、教員養成カリキュラムの全体構造の中でこれら一連の科目が有する意義と役割、そしてその関連性や位置づけなどを、特に教員の資質能力の形成向上に焦点を当てて、実践的に究明していくことが求められている。

## 注

- (1) 文部省教育職員養成審議会答申 「教員の資質能力の向上方策等について」 1987.12.24.
- (2) 文部省教育職員養成審議会第一次答申 「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」 1997.7.28.
- (3) 附属 4 校園のそれぞれの 1 日観察・参加実習の目的については、『平成 12 年度 教育実習 I の手引き』(岡山大学教育学部) pp.7-11, を参照。
- (4) 黒崎東洋郎は、本学部の学校教育教員養成課程の平成 11 年度 1 年次生が行った附属小学校・中学校 1 日観察・参加実習について調査・分析し、「附属小・中学校の教育を体験することは、①教職への意欲を高める効果がある ②専攻すべき学校種(取得したい教員免許状)を自己決定する上で、効果がある」と指摘している。「学校教育教員養成課程創設の理念に基づく教育実習カリキュラム—1 年次教育実習(附小・附中)を中心に—」 『岡山大学教育学部研究集録』第 112 号, pp.31-36. 1999.11.
- (5) 幼児教育専攻は、第 2 免許としての保育士を必修にしているので、ここでは保育士志望者数を加えている。
- (6) 附属 4 校園の「平成 12 年度観察・参加実習計画」(学生配布用プリント)による。
- (7) 「ミレニアム・プロジェクト(新しい千年紀プロジェクト)の基本的な枠組みと構築方針について」 平成 11 年 10 月 29 日 内閣総理大臣：決定  
<http://www.kantei.go.jp/jp/mille/991020millpro.html>

(平成 13 年 1 月 31 日原稿受理)

Title: Formation of the teachers' ability in teacher-training programs in universities: The analysis of the freshmen' observation-and-participation course at Okayama University in 2000.

Hideki ARIYOSHI (Faculty of Education, Okayama University)

Abstract: Today, we have an urgent need to form and improve the teachers' ability to raise the next generation. This is crucially important when we are to solve the increasing educational problems such as refusal to attend schools, quitting schools, bullying, acts of violence, etc., and to cope with the radically changing society. The formation and improvement of the teachers' ability are generally attained in three stages: first in teacher-training programs in universities, second in the selection processes in appointing new teachers, and third in study programs for teachers on the active list. This paper examines the formation of the teachers' ability in the teacher-training programs in universities that are based on the report of the Teacher Training Council. It particularly focuses on the freshmen's observation-and-participation course in the teacher-training program. The questionnaire was conducted on the freshmen that took the observation-and-participation course in the Faculty of Education at Okayama University in 2000. The carefully analyzed results indicate the significance of the observation-and-participation course to the formation of the teachers' ability, as well as its present problems and future prospects.

Keywords: Teacher training, Teachers' ability, Student teaching, Observation and participation